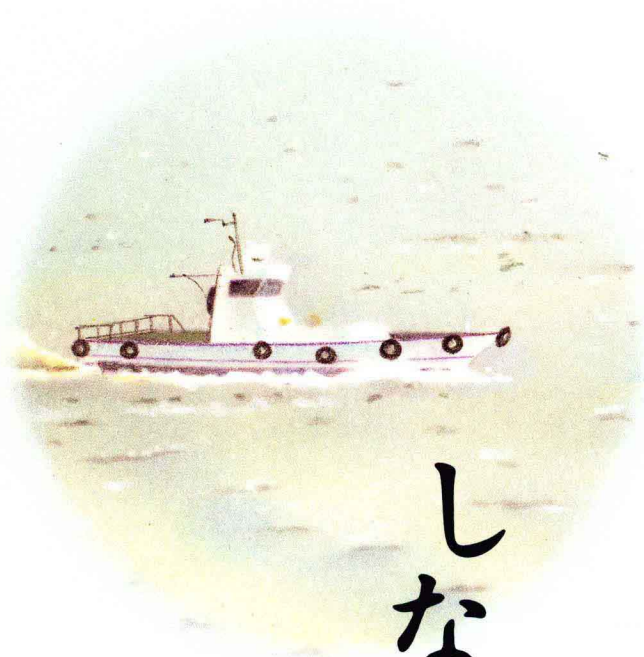




し な の 川

鶴見正夫…文

黒井健……絵



し な の 川

鶴見正夫…文

黒井健……絵

川は人、水はこころ

鶴見正夫

新潟県の北端に生まれた私がはじめて信濃川を見たのは、小学校
中学年のころ。その時の、雄大さに対する心のふるえは、今もこ
の胸に残っています。数年前この絵本を作るために、流れを追っ
て旅した時も、少年の日の感動はまたよみがえってきて、大河を
前に私は、語る言葉を失ってしまいました。その言葉にならない
コトバを、あえてゆるやかなリズムにのせてうたってみました。
川は人、水はこころ……。大自然にだかれて生きるすべての生命
への讃歌の意をこめて。

川、穏やかに

黒井健

私は、信濃川が日本海にそそぐ新潟市に生まれて、川を身近に感
じながら23年間をすごしました。その川辺や橋には折々の思い出
をたくさんもっています。3年前の早春に信濃川、千曲川の上流、
川上村から河口までを駆け足で見てきました。川は細くなったり
広くなったり、さまざまな曲線を描きながら流れていましたが、
やはり川辺には人々のささやかな営みがありました。こうして長
い時間たくさんの思い出を積んで流れる川を、いちばん穏やかな
姿で描きたいと思いました。

なお、次の本の一部を参考にさせていただきました。紙上を借りてお礼申し上げます。
※弓納持福夫写真集『信濃川』新潟日報事業社
※栗田貞多男写真集『千曲川』グラフィック社
※『学研の図鑑・中部地方』学習研究社

しなの川.....1994年12月27日 第1版第1刷発行

文.....

鶴見正夫

1926年新潟県村上市に生まれる。早稲田大学政治経済学部卒業。在学中から詩・童謡を書きはじめ、その後、童話・創作児童文学も手がける。阪田寛夫、関根栄一氏等と「6の会」を結成、新しい童謡の創作活動を進める。詩集・童謡集に『日本海の詩』(理論社)、『あめふりくまのこ』(国土社・第6回日本童謡賞、赤い鳥文学賞特別賞受賞)などがあり、童謡に関する業績により第3回サトウハチロー賞を受賞。その他に『ふしぎな音をおいかけて』(童心社)などの童話作品も多数ある。

発行者.....

江口克彦

発行所.....

PHP研究所[編集※佐藤治 佐波由美子]
東京本部※〒102 千代田区三番町3番地10 [普及一部]電話03-3239-6233 [第三出版部]電話03-3239-6221
京都本部※〒601 京都市南区西九条北ノ内町11 電話075-681-4431[代表]

印刷所・製本所.....

大日本印刷株式会社[P.D.半澤敏雄]

写植印字.....

バグ・フリーク

デザイン.....

羽島一希

絵.....

黒井健

1947年新潟県新潟市に生まれる。新潟大学教育学部卒業。出版社で2年間絵本の編集に携わった後、フリーのイラストレーターとなる。雑誌『詩とメルヘン』(サンリオ)に掲載した一連の作品で、第9回サンリオ美術賞を受賞。絵本作品に『ごんぎつね』『手ぶくろを買いに』(偕成社)、鶴見氏とのコンビで『どんぐりたろうのき』(佼成出版社)、『くまのこくまたろうのさかなつり』(PHP研究所)などがあり、画集に『ハートランド』(サンリオ)、『ミシシッピ』(偕成社)などがある。

©Masao Tsurumi & Ken Kuroi 1994 Printed in Japan ISBN4-569-58923-5 落丁本・乱丁本は、弊所宛御送付下さい。送料弊所負担にてお取替えさせていただきます。

にいがた、ぼくの生まれたまち――、
生まれて、はじめに にほんかい 日本海があつた。

海の水はあふれ、あふれて、

ふりむけば、そこに しなのがわ 信濃川。

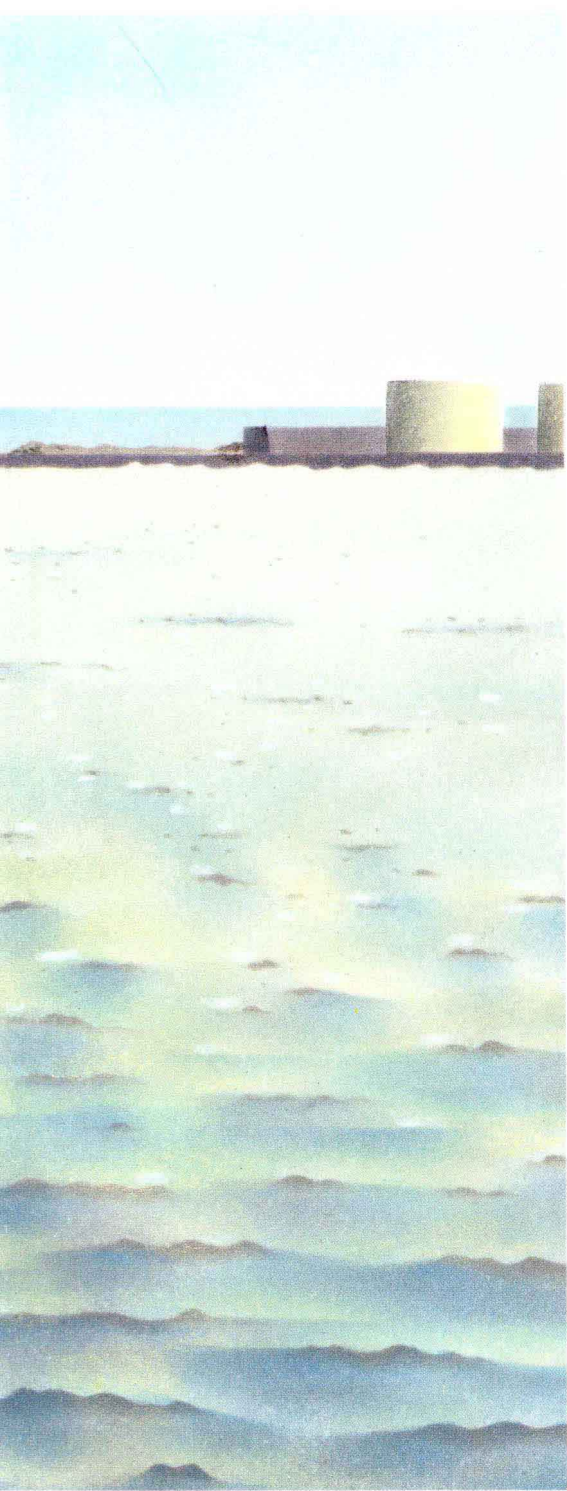
川が 海へ流れるのだときいても、

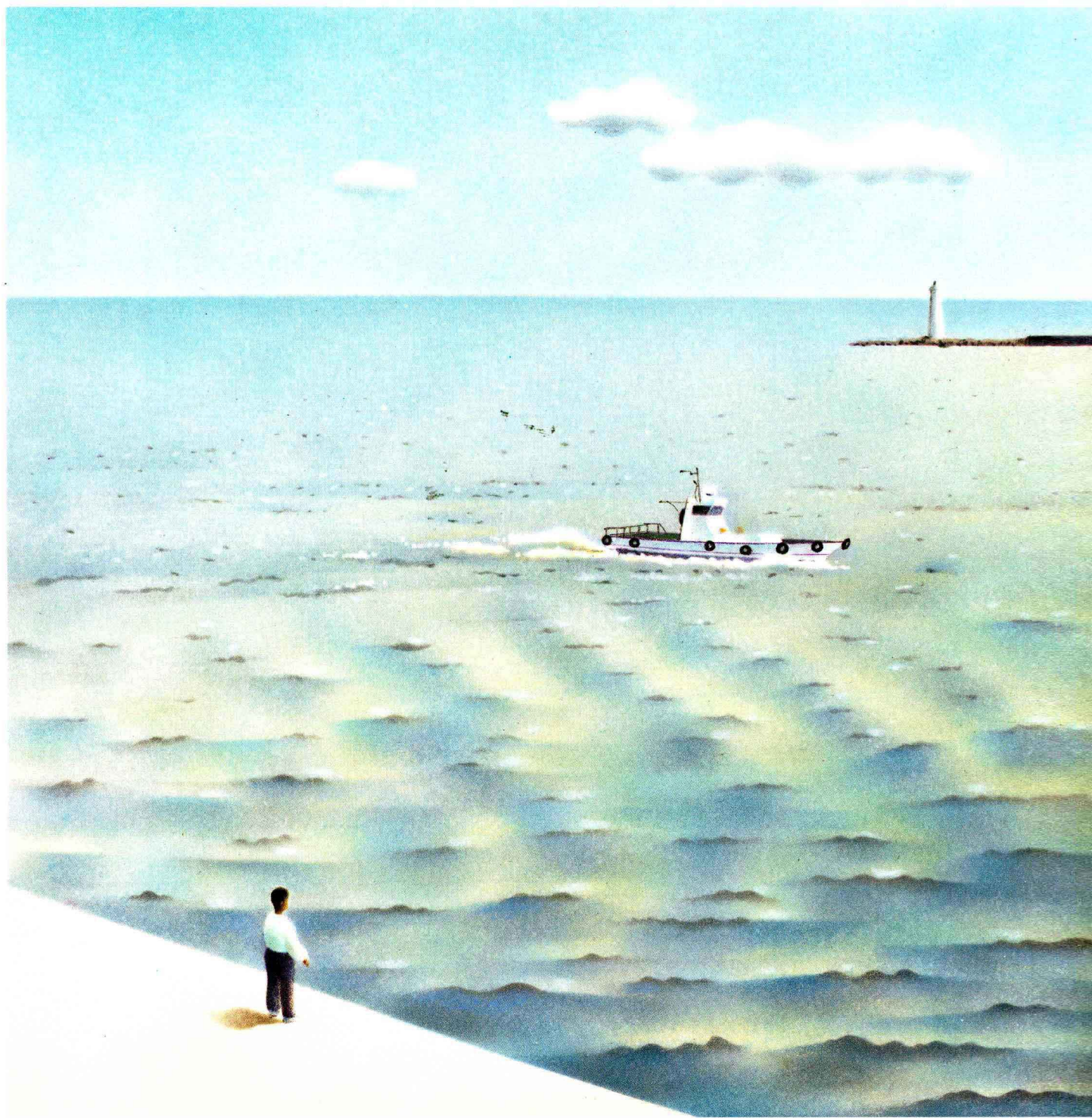
おさない目めに、大きな川は

まぶしく 海からあふれていて、

ああ、いきつくさきは どこだろう？

……ぼくは、鳥になりたかった。





春の、ある日、少年のぼくは

とらとり、ゆめみた鳥になった。

空をとんで、とんで、

雲にたずね、山をこえ、

はるかに 水のあふれいくさき――

川の流れのはじまりを、見た。

甲武^{こぶし}信^{しがたけ}岳^{がたけ}のわき水に

山やまの雪どけ水をあわせ、

おく深い谷に生まれる川、その名、千曲^{ちくまがわ}川。

岩にはね、しぶきをちらし、音高く、

木ぎのねむりをさましていく、

この きよらかな、川のうぶごえ……。





小さな川は、おどる、光る、走る、

おいかけて 空を、ぼくはとぶ。

谷をでて はじめて見る人里、ひとざと川上村。かわかみむら

ヤ！ コンニチハ コドモたち！

ラ！ ハルガキタ ハルルララ！

川は、あかるく うたいかける。





山やまからくる水をあつめ、

くねりながら、まがりながら、

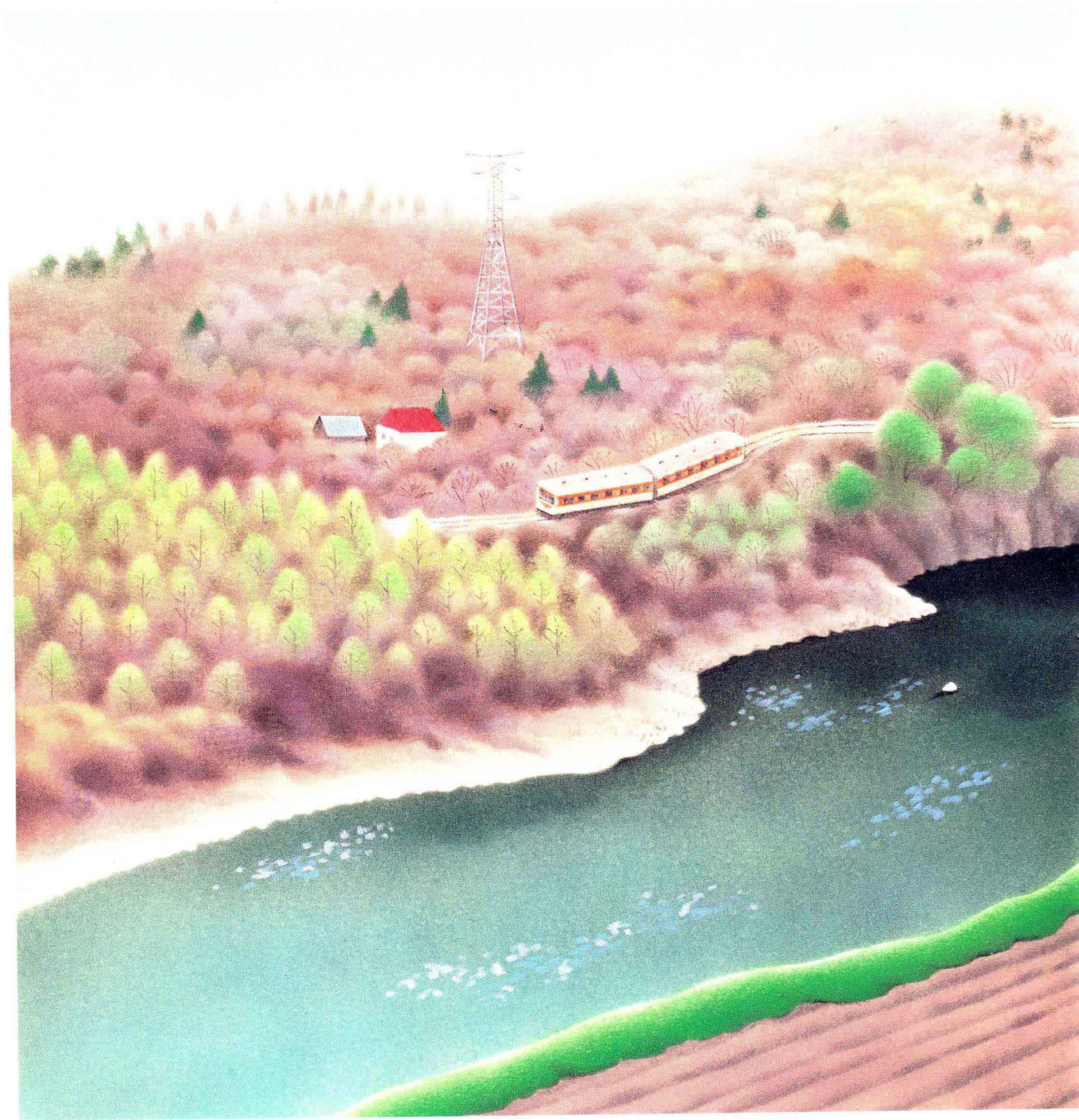
だんだん 大きくなる 千曲川。
ちくまがわ

山あいをいく 高原列車、
こうげんれっしゃ

あれは、小海線。
こうみせん

風が、ぼくにおしえてくれた。





ここは、そのむかし、しなの信濃のくに。

あんずの里には いま、

あんずの花が ほころび、

佐久さくの野は、あわい とき色。

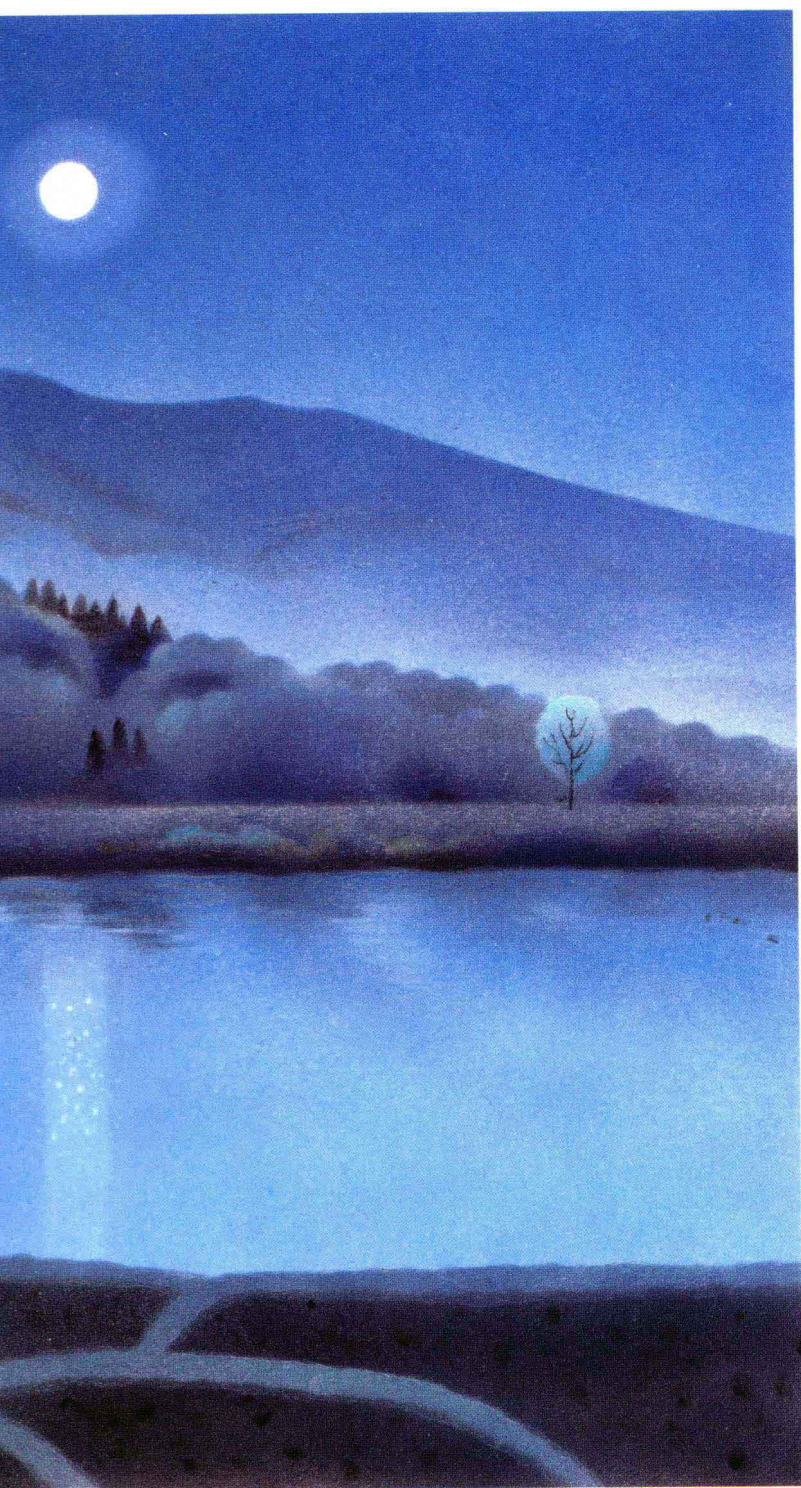
夕ばえの 川べを いそぐのは、

学校がえりの 子どもたち。





日は沈^{しず}み、ぼくは川^{かわ}べの 木^こ枝^{えだ}でやすむ。
空にはおぼろ月、さざなみも白く おぼろ。





川は、しだいに 山あいをぬけ、
やがて、越後のくにに はいる。

ここから、その名は 信濃川。

ゆたかな 流れの ほとりには、
みるみる ひろがる 芽吹きめぶの大地。

日は、ゆらゆらと 菜の花なにそそぎ、

花のかおりに つつまれて、人は

田にでる、はたけにでる。



